

# 開港場横浜と岡倉天心

横浜開港資料館副館長 西川武臣

- 1、福井藩・石川屋・横浜の町
- 2、生誕の場所をめぐって一残された人別帳
- 3、神奈川宿と岡倉天心
- 4、最近の研究から一港北区新羽町新田谷戸（しんでんやと）での聞き取り調査から

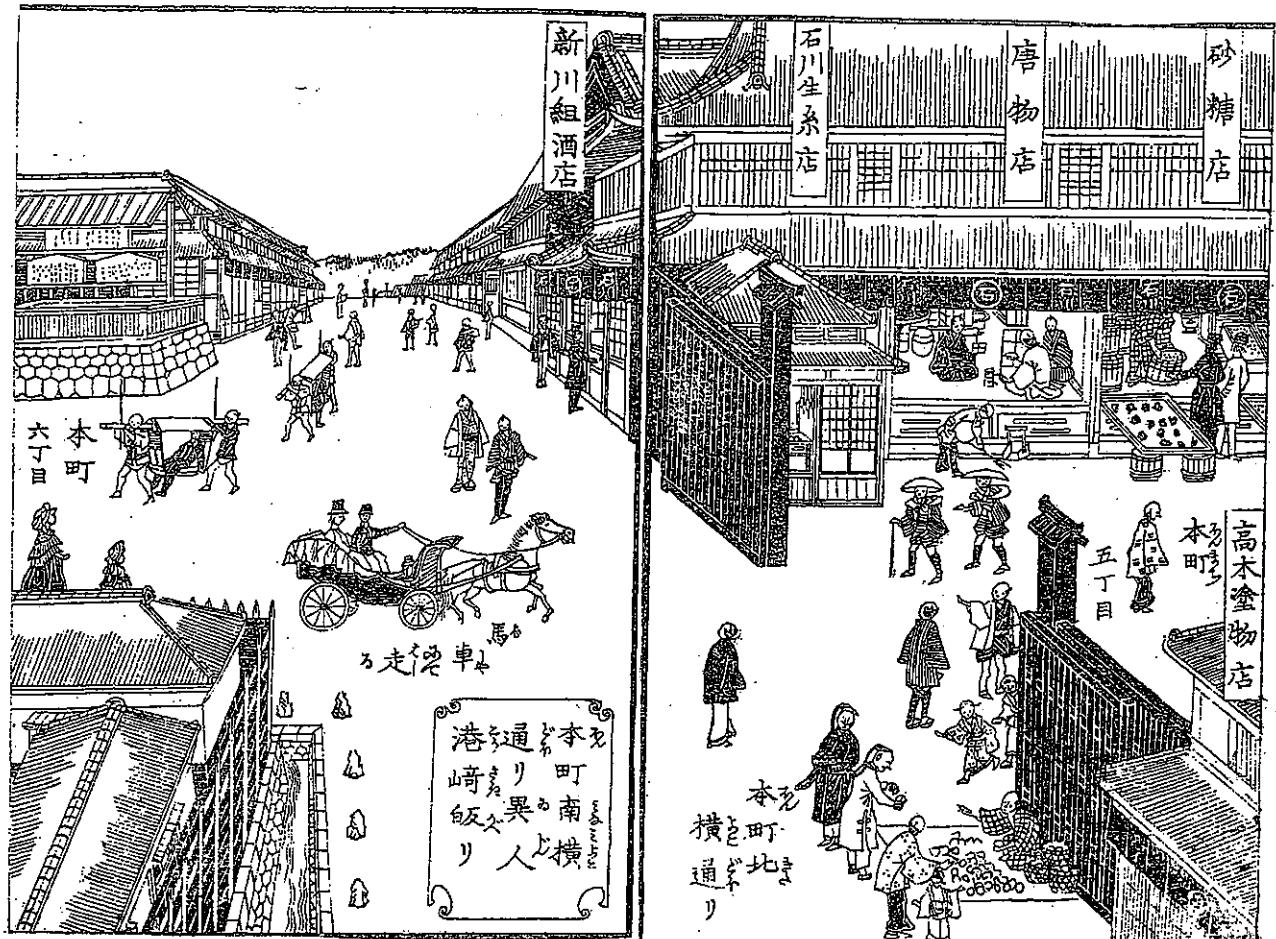
## 岡倉天心についての先行研究から

### ①青木茂著「岡倉覚三と横浜」『神奈川県美術風土記』

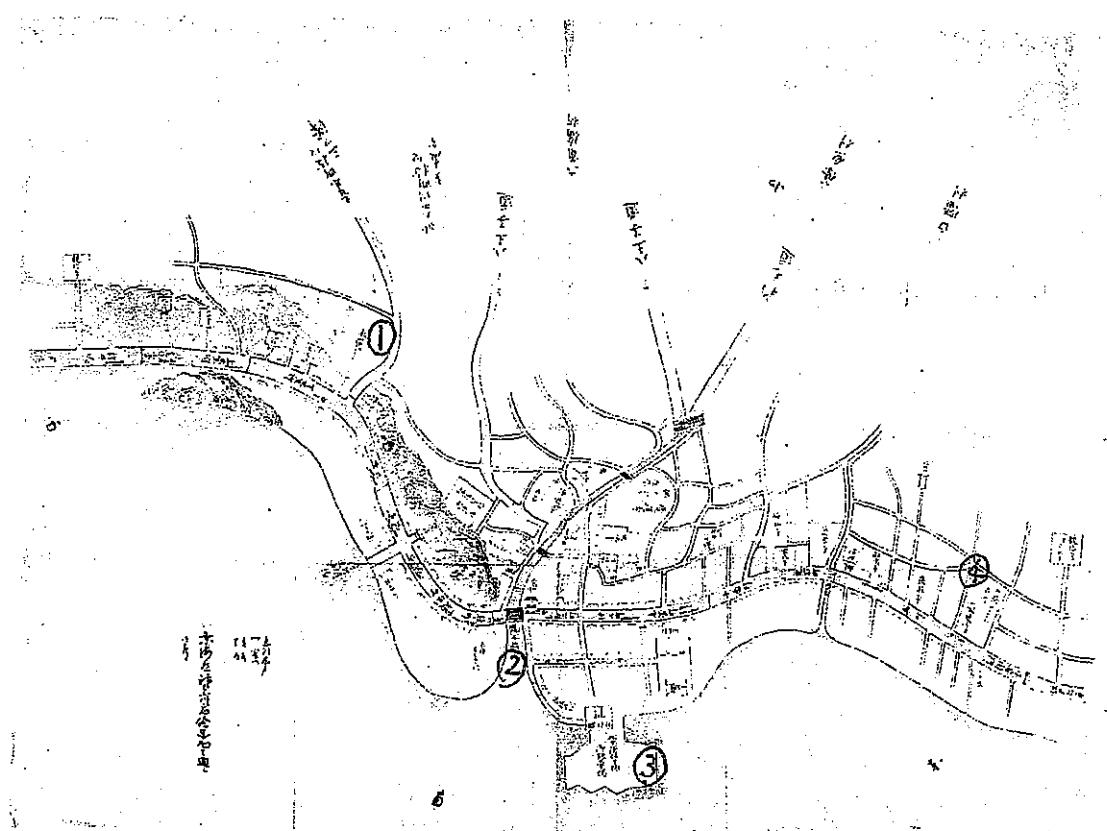
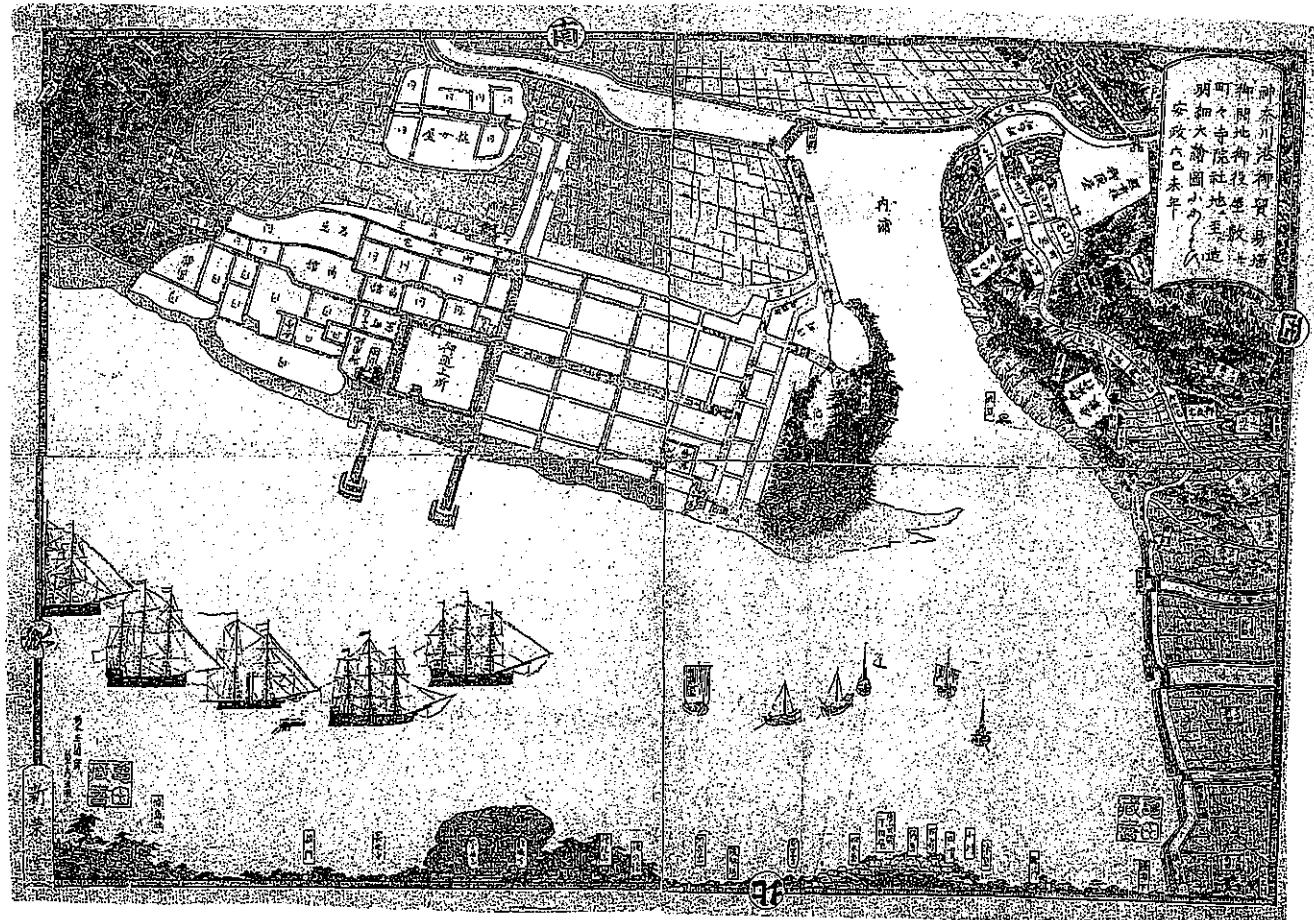
「覚三は文久二年十二月二六日横浜本町通り五丁目の生糸売込商石川屋勘右衛門商館の角の蔵で生れた」ということになっている。このことについては、今までだれしも疑ったものはいなかった。(中略)ところがである。『東京美術学校旧職員履歴書』なる綴りものが残っていて、そのうちの岡倉覚三のものの冒頭部分を写せば次の通りである。(中略)文久二年十二月廿六日江戸馬喰町旧郡代屋敷ニ於テ生ル(中略)覚三は横浜ではなく江戸馬喰町で生まれたのである。(中略)この履歴書は自筆ではないが嘘とは思えない。綴りをみてゆくと戸籍謄本と照合しているあとがあり、思いつきや作為で馬喰町とすることはありえない。

### ②新羽町善教寺の前住職平等通昭著『タゴールの学園』

岡倉天心は港北区新羽町新田谷戸の金子家に里子として育ち、やや長じて私の父の生家の神奈川新町の長延寺（もと和蘭陀領事館）の寺子屋で私達の祖父雲居玄導法師に漢籍を学んで、私の父はその幼少の頃を知っていた。



②



「幕末の神奈川宿の絵図」(保土ヶ谷区、輕部鉱一氏蔵)

一安政六未年横浜港御開に付御府内町人并諸国商人共出店致度者は領主地頭添翰を以可願出旨被仰出候に付御國諸產物  
売捌所御取建被遊度折柄同所名主石川徳右衛門義者前年太田御陣屋御持場被仰承候砌より都而御用向御頼ミ御扶持方  
等も」被下置候訣も有之旁同人名前に而地所拝借猶又左之渡世願済之上御普請御取建店支配人として与助と申者御召  
抱に相成別紙一札写之通り御下ケに相成候

生糸 吳服 太物 荒物 紙 蠟燭

右未年願済

薬種 昆布 水油 乾物 茶 質屋」

右追々増渡世被仰付候

此度國許產物為売捌武州横浜表へ商館取建候處產物廻送相整候迄當分上酒樽割売場店開に付右売捌方并店方為締其許儀  
當未六月より押廻五ヶ年之間年季召抱候然る上者給金并諸雜費金等之儀者内願之通り承置其時々相渡し可申左候得者店  
方締者勿論商方正路之取斗利益之勘弁肝要之事に候」依之年季首尾能相勤暇差遣候節者利分之内より相應之出情金遣可  
申事尤當方模様柄により不時之暇遣候儀も可有之候半か其節者相当之及扱可致遣者也

一御土蔵壹ヶ所 武間に五間

但し開港翌年申二月より取掛り五月中出来に相成候西十月御店類焼之節」相残り聊御取繕ひ迄ニ而相済候

一地所坪数之儀者本町通り表間口六間 横通り奥行拾五間 九拾坪内 表坪八十坪 但し壹坪に付 銀壹匁九分  
裏坪 拾坪 但し壹坪 銀九分五厘

メ 壱ヶ月

地代百六拾壹匁五分

一未年十一月売込相始候節より御國產并諸国商人荷物共売高より五厘運上壹歩五厘口錢銀メ武歩宛取之來候處問屋仲ケ  
間に而も口錢高追々引下ケ候に付去酉九月中御評儀被成下」売高より壹歩五厘と御定め運上差引全く壹歩宛之口錢銀  
上納仕候當時之姿に御座候

附り 相州小山村原清兵衛儀者別段無拠訳合も有之候に付運上銀共高より壹歩請取來り候且又甲州町人若尾逸平分

者同断に付壹歩武厘五毛宛請取候

一金右衛門儀未四月より太田御陣屋御普請中御作事方下代兼勤仰付出張仕居候に付御店毎月勘定之都度々に御雇相成候訳も有之候處御國產之内貿易不向之品も出来猶又上ミニ酒」其外壳捌而已に而者御益之御見繕も無之に付御國產は素より諸国商人共生糸之儀も専ら売込渡世之御店に御引直し可被成旨に而未ノ十一月御制產方下代被仰付候左候御家來之姿に而者指支之筋も御座候に付翌申三月御同所為御内用立替之上横浜商館手代勤被仰付跡式之儀者於御國表養子之者諸下代之内へ御召抱可被成下旨被仰付候右に付御給金并御」取扱之義者都而与助同様被成下候旨且又商ひ高御口錢之内に而御店諸掛り差引全く御益高より壹割節句毎に可被下置旨御極め被下重陽後者十二月御下ヶに相成候段被仰付候

一昨酉十二月太田御陣屋御持場替に相成候に付石川徳右衛門名目に而渡世筋當分指支無之候得共後憂之程も可有之哉との御評儀に付改而御國御城下町人山口」小左衛門出店願出候趣に而外國御奉行松平石見守様へ願出候處戸部御奉行所へ罷出御指図可請旨被仰付候に付申談徳右衛門より上地願指出跡地所小左衛門拝借仕度段双方より願立候處外品之義者左之通り御聞済に相成候得共生糸之儀者新規願は御取揚ケ無之由に而小左衛門儀者徳右衛門店之内間仕切致し左之渡世可致旨被仰付候に付」暖簾等相改め生糸之分當時徳右衛門名目に而渡世仕居候依之両益暮金三両宛被遣候事

一 茶 木綿 紙 塗物 荒物 乾物 葉種

一前書支配人与助儀無拠訳合も有之に付当戌四月中御暇被仰渡格別之御慈体に而御手當て金等御取扱被成下候」猶又以來御店相続筋之儀に附而者御改正被仰出質素着之御趣意を以左之通り被仰渡候依之手代共より一札取之奥書印形仕差上候

御 店 締 役

金三拾兩也

但し是迄通り壹ヶ年如此益暮兩度に御渡し被成下候事

(4)

(5)

生國二年三月

人相談

生國越州足羽郡福井

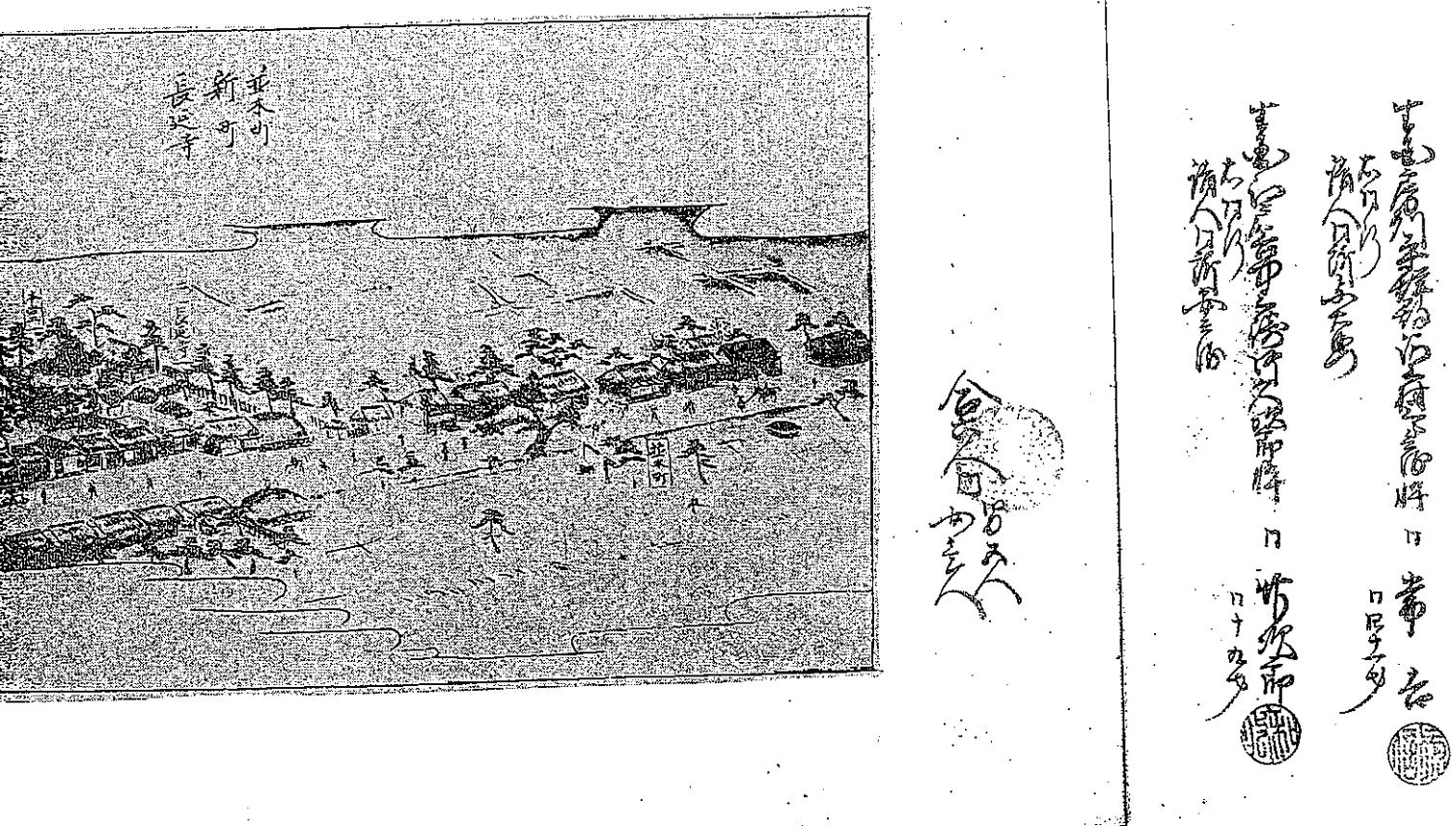
全右衛門



生國御當所  
覺藏  
金右衛門  
石川  
生糸店  
之圖



生國御當所  
覺藏  
金右衛門  
石川  
生糸店  
之圖



海岸通りは船積の問屋多く、また弁天町は異品渡來の處を売る家多く、夜に入りては木戸ぎわなど商人、水菓子、天ぷら、鮨、大福、だんご、焼そば、でんがく、按摩、声いろ、義太夫ぶし、高音を入れて新内はうた、港崎がえりのかごの声にまじえて駒下駄の音がまびすしく、高らかに騒ぎあるく美女たちの洗い髪、ちよいと結んだあだ者あれば、港崎長屋へ行きかけのさんげさんげが錫杖は成田山から秋葉山、火の用心は町役人、さきに鉄棒二人たち、何かは江戸に変ることなく、旅籠屋の二階をまわる第一番から二番手まで、按摩と茶屋の娘たち、旅人にすすむる瞬、寝耳に入る。つぶやきて寝入る中にはね起きてあつまり、勢みなうちつれ港崎町岩龜桜へといそぎゆく。これは岩龜のうちに扇ざしき、竹のざしき、あるいは鶴または松などのあるを見物に行きたるなり。

また本町四丁目には中居という見世あり。座敷は異人のこのみにまかせ、中庭へ小鳥をはなち、金あみをもて天井四方をかこい、風流なるはびいどろにて壁の内をはりて、水をいれて金魚のここかしこに遊びてめずらかなり。この座敷に二尺余の四足台に横一尺七八寸、豎六七寸の箱をおきてあり。これはヲルゴルの大なる物にして、最もその音色美にして高し。

向い側五丁目の藤木屋同黒江屋は、江戸日本橋通丁よりの出店にして、千金余の塗ものを飾り、その金銀をもつて高まき絵など、そのほか手をつくしたる日本の名産美高品たるや、これを見て足をとどめざるはなく、ことさら異人も多くはこの品を求めぬはなかりける。あるいは瀬戸物にうるしを交え、金銀胡粉をもつて彩どり、人形または鳥けものを作りたるあり。日本諸国の產物なに一つなきはあらず。家作は多く塗屋あり、木地なるもあり。

# かつて 神奈川湊は物流の 重要拠点だった

文◎西川武臣（横浜開港資料館調査研究員）



Negretti and Zambra.

## POR T OF KANAGAWA, With Chinese Shipping.

幕末の神奈川湊（横浜開港資料館蔵）

写真は湊の中心地であつた「宮の河岸」付近を写したもので、手前に写っている鳥居が現在の洲崎大神（当時は洲崎明神と呼ばれた）の鳥居と考えられます。当時、この地点には横浜町への渡船の発着場がありましたから、横浜へ向かう途中で神社の裏手の山から河岸を写したと考えられます。

興味深い点は大きな船が何艘も写されていることで、写真が鮮明ではないため断言はできませんが、これらの船は「千石船」と呼ばれる外洋船と考えられます。

この写真は、開港直後に外国人カメラマンが撮影したもので、現存する神奈川湊を写した最も古いものです。神奈川宿は海岸に沿って町並みが広がっていた宿場で、この宿場には神奈川湊と呼ばれる湊がありました。湊の中心は現在の神奈川区青木町の洲崎大神付近で、神社の前にあつた「宮の河岸」では沖に停泊した船からさまざまな物資が陸揚げされました。「宮の河岸」からは周辺の村々で作られた多種多様な物資が運び出されました。

横浜開港資料館に幕末の神奈川湊を撮影した一枚の写真が保管されています。

# 残された 一枚の写真

す。喫水線の状態からみて、これらの船は荷物を積んでおらず、空船で停泊しているようです。この写真は、東京湾の外洋（外洋）から荷物を積んで神奈川湊に寄港した「千石船」が荷物を下したところを撮影したと推測されます。

神奈川宿は東海道の宿場としては有名ですが、この宿場に「千石船」が寄港するような大きな湊があつたことは案外知られていません。神奈川湊について記した最も古い記録は、神奈川県立金沢文庫が記されたもので、この時期から神奈川湊には多くの船が入津していました。十四世紀末から湊の周辺には町がつくれられていましたから、東海道が整備される以前に、神奈川宿が設けられた地点には大きな湊町があつたことになります。

## 【江戸名所図会】 に描かれた「宮の河岸」

残念ながら、中世の神奈川湊についての記録がほとんどないため、詳しいことは分かつていません。家康が江戸に居を構えた天正十八年（一五九〇）以降、この湊は中世以上の繁栄をみせていきます。特に、十七世紀に入り「首都」である江戸が大きな都市に変貌するようになると、現在の首都圏と呼ばれる地域の物資流通が活性化し、それとともに神奈川湊は東京湾や相模湾の中で最も大きな

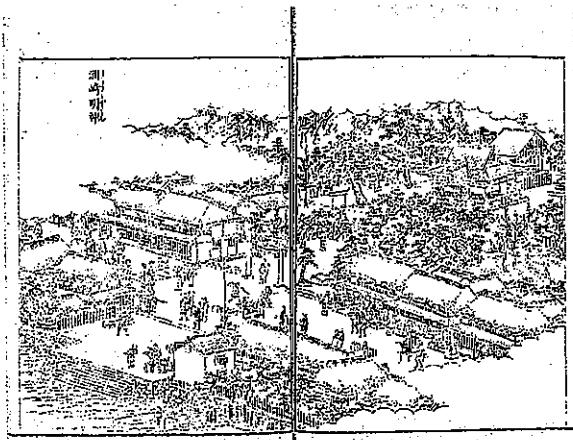
湊になりました。

湊が発展した理由はいくつあります。が、神奈川湊が現在の八王子市や三浦半島などを含む広い後背地の町や村と密接な経済関係を持ち、こうした地域とさまざまな物資の取引をおこなつていてことがあげられます。この湊からは、後背地で生産された品物が各地に出荷され、全国各地から送られた品物が馬の背に積み替えられて後背地に送られました。

湊の中心であつた「宮の河岸」については、江戸時代後期に描かれた一枚の絵が残されています。この絵は、天保五年（一八三四）に刊行された『江戸名所図会』に収録されたもので、江戸の町絵師

長谷川雪旦<sup>せうだん</sup>が描いたものです。絵には船から下したばかりの樽が描かれ、荷数を確認しているかのようないわゆる船問屋が軒を並べていたと伝えられ、彼らは荷物を運ぶ船と宿場の商人とを仲介しました。残念ながら、現在では埋立が進み『江戸名所図会』に描かれた面影はありません。湊の繁栄に大きな役割を果たした廻船問屋も残っています。墓地に廻船問屋をつとめた家の墓塔だけが残されています。

蒸気船が大量の物資を運ぶようになり、鉄道網が整備されると、もの運ぶルートも大きく変わっていきました。そうした中で、神奈川湊も明治時代後期以降になるとしだいに衰退していくと思われます。しかし、明治四十年代以降も神奈川町（神奈川宿）から横浜に進出した商人が大活躍するなど、地域の流通や経済の拠点として繁栄した湊の伝統は引き継がれていきました。



『江戸名所図会』に描かれた「宮の河岸」（横浜開港資料館蔵）

この地点には船荷を扱う廻船問屋が軒を並べていたと伝えられ、彼らは荷物を運ぶ船と宿場の商人とを仲介しました。残念ながら、現在では埋立が進み『江戸名所図会』に描かれた面影はありません。湊の繁栄に大きな役割を果たした廻船問屋も残っています。墓地に廻船問屋をつとめた家の墓塔だけが残されています。

幕末期の神奈川宿  
絵の手前から奥に向かう道が東海道。海を挟んで横浜村や本牧が描かれている。中央に「宮の河岸」があった場所にあたる「洲崎神社」の文字が見え、沖合いには多くの船が描かれている（横浜開港資料館蔵）

